
候補生たち

杉林機構

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

候補生たち

【Nコード】

N9305Y

【作者名】

杉林機構

【あらすじ】

魔界、魔力、そして魔法。隠されていた秘密を暴き、地上を魔界にしようとする襲撃の夏から半年。聖木乃女子学院にはそれぞれの思惑を抱えた守護者候補生たちが集まっていた。府本里美、昴星河の二名もまた。果たしてライバルを蹴散らし、守護者の椅子を勝ち取るのはだれなのか。

1 わたしが、良い子じゃないって。

神社自体にはなんの興味もなくて。

だから名前も知らないし、なんの神様かも知らないし、ちゃんとお参りしたこともない。

けれど、たぶん気にはなっていて。

うまく説明できないけど、古い大きな木がたくさんあって、いつも暗くて、いつも人の気配がなくて、いつもひんやりしていて、なんかとくべつな場所って感じがしてた。友だちとケンカしたとき、親に叱られたくないとき、色々悩んだり落ち込んだりしたときつまり、ひとりになりたいとき、つい行ってしまふ場所だった。

お賽銭箱の裏側に座って、向こう側にはきつと神様がいるはずの扉にかかった重たそうな錠前をぼんやり見つめていると、ふしぎと力が湧いてくるような、そんな気がして。

わたしの場所ってどうか、パワースポット？ みたいな。

でも、あの日はちょっと違っていて。

友だちとプールに行く約束があつて家を出たのに、気づいたら神社にいた。セミの鳴き声に囲まれて、じつとりと汗をかいて、下に着ていた水着が変に張り付いていて、暑いのになんだか寒いような、いつもとちがって気持ち悪い感じ。

「あー、あー、あーあー……」

わたしはバカみたいに口をあけて、声を出していた。

そうしていないと息苦しかったから。

遅れるからメールしようとか、はやく泳いでさっぱりしようとか、そろそろ宿題を片付けようとか、帰りにアイス食べようとか、色んなこととか、からまりながら頭の中をぐるぐる洗濯機みたいに回っていて、けど、なにひとつ考えてもなくて、どこかおかしかった。そして足は勝手に動いていた。

「……あー、あーあー、あー、あー、あーあー」

神様の集金箱をいつものように無視して、その奥の扉にかけられた錠前に触れる。なんとなく、けれど、たしかに開く予感があった。実際、鍵もなにもなくカチリと動いて、血みたいな鉄の匂いが鼻を刺す。中に入ろうなんて思ったこと、一度だつてなかったのに。わたしはガチャガチャ外した錠を投げ捨て、力いっぱい扉を開いていた。

冷たくて、かび臭い空気があふれ出て。

「こんにちは」

不意に、背後から声をかけられて。

「あつ」

わたしは吐き出しかけていた声と一緒に息を飲み込んだ。

悪いこと、してる。そう思ったら背中からどつと汗が出てきて、それがすぐに冷えて、身体がひやっと震えて、動けなかった。一度、本屋さんで万引きした中学生が呼び止められるのを見たことあつて、逃げられそうなのに、逃げられなくなっちゃう。こんな感じなんだ。捕まるんだ。

「聞こえなかった？ こんにちは」

「……」

どつくとつく。

息苦しくなるような、脈打つ血管の音を耳の奥に感じながら、両親のこと、考えてた。一人娘が捕まったら、どう思うだろうって。けど、あんまり深刻な気持ちにならなかつた。逆に、あの仲良しで優しい二人が、どんな風になつてしまふかつて、ワクワクする。『あんななんかウチの子じゃない！』とか言われちゃうとかつて。こんな日がいっつかくるって思ってたのかもしれない。なんか変だけど、わかつてた。

わたしが、良い子じゃないって。

どつくとつく。

「どうしたの？ ねえ？」

足音がどんどん近付いてくる。

お父さんが、これまであまり聞いたことのない落ち着いたトーンで言った。

横でお母さんがうなずいて、わたしもうなずいて。

「ぶはっ」

生ぬるい水で顔を洗ったら、それほど悪いことしたっけ？ と冷静になる。たしかに、神社の社殿に勝手に入るのは悪いことだろうけど、学校の先生を呼ぶほどのこと？ 鍵だつて最初から壊れていたのでは？ 中にも入ってないし？ 居間にいた女の人が神社の人？ 次から次へと疑問が湧いてきて、まとまらなくて。

「どうでもいいや」

すぐに考えるのをやめた。

あの一瞬にワクワクしたような感情はもうどこにもなくて、これから面白くもなんともなさそうな現実的お説教が待ってるだけと思つたら、なにもかもバカバカしい。わたし、どうかしてた。夏休みのなにかで浮かれて。くっだらない。

部屋に戻ってケータイを見ると、約束をすっぱかしたらしいことだけ現実。

心配するメールから、だんだん怒っているらしいメールへ。

フォロー、大変だ。けど、ともかく先生を待たせていた。言い訳は後で考えよう。さくつとマジメに叱られればお説教もそんなに長時間にはならないはずだ。こんなに朝早くから来ているのだし、先生も女の人も、そもそも両親だつて今日の予定がある。

「お待たせしました」

できるだけよそ行きの声で、わたしはわざとらしく反省しながら居間に戻る。

廊下で正座をして襖を開ける。テレビで見た旅館の仲居さんがそうするようにおしとやかにそして深々と頭を下げて、バカみただけど、子供なりに真剣にやつてるんだなと先生たちが思ってくれれば、笑われてもオツケー。そんな、きつたない計算で。

「その、昨日は、申し訳ありませんでした」

そう言っつてゆつくりと頭を上げると、

「あ、れ？」

四人の大人たちは不思議そうな顔でわたしを見ていた。

「なにを謝っているんだ？ 里美」

「……えー、つと、昨日のこと、じゃないの？」

「それなら、謝るんじゃないかって、お礼だろう。昨日、神社で倒れていた里美を家に連れてきてくださったんだ。吉田先生と、こちらの方が」

と言いながら、お父さんは繰り返すように頭を下げる。

「僕は気付かなくて、通りすがりに見つけたのは平島さんですから、担任の先生は慌てて謙遜し、

「そんな、私も偶然ですよ、昔から寺社仏閣に興味があるだけで、ついふらつと覗いただけで、そんなお礼を言われるようなことではありません。里美さんが無事でなによりです」

ひらしまさんと呼ばれた女の人が上品に笑う。

両親や先生よりは若いだろうか、でも、なんだか高そうなスーツを着ている。シャツの生地もやたらなめらかだ。顔とか身体つきはそれほど印象に残る感じじゃないけど、身なりがきちんとしているので賢そうに見える。けれど、なにより、その声は神社でわたしに声をかけたものと同じであるように感じられた。それは間違いなく。

どつくとつく。

また鼓動が大きくなった。

「いーえー、軽い熱中症ですから、里美、ほらきちんとお礼をしなさい」

いつのまにかわたしの横に移動してきていたお母さんが、そう言っつてわたしに頭を下げさせる。「ありがとございました」と言わされながら、わたしはしつくりこない。どうして、神社のこと、言わないのか。勝手に鍵を外したことを。

大人がなにかを隠すときは、必ずそうする理由があるから。

「夏、外を出歩く時は帽子ぐらいかぶらないとね？」

「……はい」

わたしは疑ってかかる。

「では、里美さんも来たので、説明をもう一度」

ひらしまさんは食卓の上に広げられていた紙をとんとんと揃えた。

「ほら、里美、座りなさい」

「うん」

お母さんに促されて座布団の上に正座して。

「これ、見てくれる？」

「はい」

ひらしまさんはわたしの前に一冊のパンフレットを置いた。表紙には大きな桜の木と、学校の校舎らしき写真。そしてなんだかオシヤレな制服を着た女の子が、ありがちな嘘くさい笑みを浮かべている。この学校に入れて幸せ、みたいな感じ。

「せいき、の、じょしがくいん……」

わたしは印刷されている文字を口にする。

「いいえ、里美さん。聖木乃女子学院中等部^{ひじり・きの}」

「はあ、そうですね……」

そう言われれば、東京に行く途中に木乃という街がある、ことは知っていて。

「来年から、この学校に通いませんか？」

「え？」

「だから？ と聞くよりはやく、見透かされるように言われた。」

「わたしが？」

そう呟いて、わたしは両親や先生の顔を見る。お父さんはなにやら難しい顔をしていて、それはお母さんも近いようで、でも先生は強くうなずいていて。

「そう、府本里美さん、あなたに、是非とも」

そして、ひらしまさんはなんだか凄みのある笑顔でわたしを見ていて。

なにかに巻き込まれてる。
整理できないわたしの頭にも、それは強く感じられた。

1 わたしが、良い子じゃないって。
(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

2 わたしとしても、やめるつもりだったけど？

ひらしまさんは、平島志穂^{しほ}、という名前で。

体操部コーチで、大学時代には跳馬でインカレ三位にもなったことがあるそうで。

言われて見れば、正座する脚の筋肉は見知った感じで。

「スカウト？」

話は飲み込める。つまり、物心つく前から、選手だった両親に連れられるまま体操競技の道を進んで、地区の大会ではそこその成績を残している。そんなわたしを学費免除の特待生として迎えたい、そういうことだった。

「ええ。どうかしら？」

平島さんは競技をやっていた人らしいきちんとした笑顔で言った。

「いい話、ですね」

良すぎる、わたしはそう思う。

生まれてから十二年、そのほとんどを捧げてなお、わたしの体操は技能的にもセン斯的にも突出したところはなく。地道な練習で地味に整った、良く言えばそのない、悪く言えば面白味のない、将来性に乏しい、大成しない、そんなものだから。ふつうにスカウトなどありえなくて。そのことはわたし自身もよくわかっているから、別にいいのだけど。

話を聞くわたしを見ている両親の表情がさえない。

全日本にも出たことがあって、わたしに才能がないことは他のだれより、きつとわたし自身よりわかっていて、それでもいつか化するんじゃないかと期待しちゃってるお父さんも、オリンピック候補とまで言われた時代もあって怪我で挫折した夢を託してくれちゃってるお母さんも、あからさまに浮かない顔をして、だまつてる。

そろそろ、あきらめどき、だから？

そうかも。両親とも小さいから、わたしの身長もそこまで伸びな

いだろっけど、成長期の身体に負担をかけて体操をつづけるのは大変なことだから。選手としての展望があるならともかく、スポーツとして楽しんでつづけるならともかく、無理してまでって。

「……なんか」

そんな想像したらムカついてきた。

わたしとしても、やめるつもりだったけど？

でもさ。ひとり娘に期待する両親の気持ちをおもんぱかって？

ぱかって脚を広げたり、ぱかって回ったり、ぱかって跳んだり、ぱかって平均台の上で逆立ちしたり、ぱかってレオタード着たり、ぱかってぱかってぱかぱかしいと思う心を押し殺してやってきたよ、わたし。

なのに。

才能ないからよそう、なんて。

そんな言われかた、されたくない。まだ言われてないけど、言われたくない。

遠回しにだって。

「いい話だから。わたし、この学校行ってもいい？」

だから、わたし、満面の笑みで言ってやった。

けど。

「……そうか、ならわかった」

お父さんの反応は想像していたのとは、ぜんぜん違っていて。

「里美、これを見なさい」

そう言っつて、テレビのスイッチを入れた。

朝の情報番組は、ふだんのゆるい空気ではなくて、コンクリートの瓦礫の山を映していた。今年はそんな映像もずいぶん見てる。でも、それは見覚えのある建物のような気がして、そして、ふと見た食卓の上の写真、聖木乃女子学院のパンフレットの表紙とダブって。ていうか、同じ場所にしか見えなくて。画面の右上隅には、爆破テロ、女子校、の文字。

なにこれ。

「なにこれ？」

思ったままが口に出て。

「……」

お母さんはなにも言わずハンカチで目元を拭った。泣いてる？

「昨日の事件だ。里美は倒れていたから知らなかっただろうが、聖木乃女子学院と、木乃の駅に何者かがテロを仕掛けたらしい。学校はこの有様で、駅に至っては跡形もない」

お父さんはテレビを消し、わたしの目をまっすぐ見た。

「これを見ても、まだ行きたいか？」

「えっ……え？」

どういう意味？

学校にテロ？ 駅が跡形もない？ わたしが行くのはテロのあった街の、テロの標的になった学校ってこと？ それって学校存続できるの？ いや、そんなこと問題じゃなくて、お父さん？ ひとり娘をそんな学校に行かせる気なの？ 正気？

バカ？ ぱかじゃなくて、バカなの？

ありえない。いくらお父さんが体操バカでもそんなことは。

「もちろん」

行かない。行くわけがない。そんな危ないところ。

「そうか、わかった」

お父さんは、わたしの言葉を最後まで聞かなかった。

うちではよくあることで。同じ競技をやったからなのか、スポーツ選手特有のものなのかはわからないけど、お父さんとお母さんは以心伝心で。その娘であるわたしも勝手に以心伝心の中に組み込まれてて、よく、言ってもいないことを合点承知されてる。

困るのだけど。

「お父さんは、ずっと言おうか言うまいか迷っていた」

わたしが口をぱくぱくさせている内に、どんどん話が進む。

「里美、おまえには体操の才能がない」

「……んな」

わかってる、けど、このタイミングで言わなくても。

「技術もセンスも、並のレベルを上回るものはないだろう。やめた
いというのならば、お父さんも無理強いするつもりはなかった。し
かし、やるというのならば、より自分を高みに運ぶことのできる環
境へ向かうべきだ。お父さんやお母さんから離れても」

と、思うと言葉もでなくて。

「才能、技術、センス、言うまでもなくどれも必要なものだ。だが、
それだけで勝てるものでもない。最後にものを言うのは危険へ飛び
込む勇気だ！ プレッシャーの中で自分を見失わない度胸だ！ 不
可能へ挑むチャレンジング・スピリッツだ！」

最後にものを言うものが三つもあります、お父さん。

「体操は常に死と隣り合わせの競技だ。だからこそ、いつでも死を
意識して、その恐怖に立ち向かわなければならぬ。体操をつづけ
るとい意志があるとわかったからには、己を厳しい環境におくこ
とも大切だ。それが里美、才能を超える武器となるはずだ」

そう言い切って、自分の言葉に納得するようにうなずいて。

「娘をよろしくおねがいします」

お母さんが平島さんに頭を下げた。

「ええ、必ず里美さんを立派な選手に育て上げてみせます」

「……」

どうということ？

それは、たしかに言ったけど？ わたし、この学校に行きたいっ
て。うん、言った。でも、ふつう、テロの現場に娘を送り出さない
って、まともな親なら。まともな……そっか、あんまり意識してな
かったけど、まともな親じゃなかったんだ。じゃ、仕方ない。

今、わかったよ。

「あの、よろしくおねがいします」

わたしも、両親に合わせて頭を下げる。

テロで死んでも、体操で死んでも、どっちでも死ぬのは同じ。

なんて、簡単に割り切れるわけもなくて。

また、神社に来ていた。

朝ごはんを一緒に食べながら、テロのこと「二度目ということがないように最高の警備体制を敷くので、日本で一番安全な学校になります」とか、平島さん言ってた、けど。もちろん、それで不安が安心に変わるなんてこと、あるわけなくて。でも、本質はそこじゃなくて。

いいのかな。

わたしの人生、こんな風に流されてて。

よくないな。

賽銭箱によりかかって、神様の扉を蹴っ飛ばして、いつもと変わらずかかっている錠前をがたがた言わせて、汗でしんなりした前髪がそよ風でひんやりして、おなかが空きはじめて、もうお昼ぐらいになつてて、わたし、どうしようもない感じ。

お父さんのことも、お母さんのことも、嫌いってわけじゃなくて、体操もなんだかんだ言つて、積み重ねてきて、捨てるのがもったいなくて。

だから、新しい環境に行つてみたい気持ちもあるけど。

わたしがほんとうはどうしたいのか、わからない。自分でも。

「もつと、なんか、ないかな……」

「あるよ、里美さん」

眩きに被せるように、後ろから言われて、見上げて。

「あなたには資質がある」

平島さんが賽銭箱の上に乗っちゃって、わたしを見下ろしていた。

どういう理由かわからないけど、巫女さんの服を着て。

「そこ、乗っていいんですか？」

「ああ、これ？ 別にいいんだよ、ここに神様いないから。お賽銭を投げる人もいないし」

「いない？ お賽銭を投げる人も？」

「ていうか帰ったんじゃ」

「帰ってるよ、ここが私の帰る場所だもの」

「体操部のコーチが？」

「あれはウソ。ごめんね。学生時代に体操をやったのは本当だけど、今は、ここを守るのが仕事だから。そして資質のある人を見つけたら、学校に入ってもらうのも。今回は状況が状況なのでやや強引で性急なアプローチを仕掛けたってわけ」

「うそ？ ここを守る？ 資質？ 状況？」

よくわからない。

「昨日のことで一番の難関はご家族の了承だったからね？ もっと時間がかかることも覚悟してたけど、話が早めに片付いて助かったわ。これからが本番だもの」

平島さんは、ぴゅんとジャンプして、扉の前に立つと、鍵も使わず錠を外した。

昨日の夢みたいに。

「それ……」

「里美さんが倒れたのは熱中症じゃない」

平島さんはゆっくりと扉を開いて。

「急に魔力を浴びすぎたから、身体がついていけなかった」

「……ま、りよく？」

わたしが呟いて、平島さんがうなずいて。

「魔力、魔界から溢れるエネルギー！ それを操る魔法でこの世界を守る守護者。あなたにはそうなれる資質がある。だからこの場所に入れたし、鍵を開けることもできた」

「しゅごしゃ？」

神社を取り囲む木々が、ざざ、と揺れて。

「ようこそ、里美さん。競技でも偽装されたテロでもない、本当の世界へ」

わたしに手を差し出しながら、平島さんはどこか哀しそうに笑って。

「ほんとうの、世界……」

たぶん、逃げようと思えばそうできたけど。
そうしなかった。

「……ほんとうに？」

くすつと笑って、私はその手を取って、誘われた。
昨日感じた、ワクワクした気持ち、まだここにあったから。

2 わたしとしても、やめるつもりだったけど？（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

1 昴 星河

地球を含む広大な宇宙がひとつの世界であるように、『魔界』もまた数多の世界のひとつでしかなかった。それぞれの世界は、それぞれ無関係に存在し、それぞれの時を歩んでいる。世界と世界の狭間は『境界域』と呼ばれるなにもない領域によって時間と空間を隔てられ、本来は交わることもない。

その本来的には交わるはずのない世界の境界を乗り越えてしまふ力こそが、魔界の魔界たる由縁とも言える『魔力』であつた。そのエネルギーは欲望する。空間的、時間的制約を無視して魂を求め《転位》し、魂の意志を侵蝕し《変異》する。植物を著しく成長させ、動物を魔獣へとその姿を変え、そして世界を魔界に創りかえる。それは人間も例外ではない。だからこそ秩序に対する大きな危険であつた。

そんな魔界、魔力からこの世界を守る存在が『守護者』である。地上に魔力を放出する『魔界の穴』から人を遠ざけ、魔力による影響を最小限に抑えることが彼らの目的である。歴史的、社会的経緯により様々なルーツを持つ彼らだが『魔界の生活技法』通称『魔法』を用いるという点に関しては共通している。魔力を知ればこそ、魔力を用いることでしか対抗できないことは明らかだつた。結果、彼らは『魔法』を世に隠しながら、『魔法』を使って世を守る、という二律背反を背負っている。そしてそれは除去困難な『魔界の穴』という原因と共に、解消されることなく一族の秘密として受け継がれることになつた。

昴^す星河^{のほしが}もそんな守護者の家に生まれたひとりである。

兄一人、姉二人、妹二人、三女の星河が『資質』に目覚めたのは十一歳の冬。

その年はじめて積もった雪で遊んでいる内に、気がつけば昴家の管理する魔界の穴がある古墳へ導かれていた。古墳と言っても本物の墓所ではなく、その時代より受け継がれたカモフラージュである。鬱蒼と生い茂る木々に隠され、魔力を体内に十分吸収していなければ認識することすらできない場所へ誘引されること。それこそが資質の第一条件である。

星河の握りしめた雪玉が氷の塊になっていた。

「なんやの……ここ」

彼女の目の前にはどこか巨人が思いつくままに積み上げたかのような無造作さで、しかし決して崩れないバランスの岩石がモニュメントを作り出していた。アンバランスな構造物は、まるで崩してほしいと言っているようにも見える。

「えらいもんや」

そう呟きながら、星河は内側から湧き出る衝動のまま、雪玉だったものを巨石群に向かって投げつける。フォームもない力任せの投擲だったが、氷塊は積もったばかりの雪を吹き飛ばして、巨石の一つに突き刺さった。およそ人間の膂力ではない。

「すっごいわあ」

投げた星河本人にとってもそれは信じられない光景だった。近付いてみると、突き刺さった岩石に亀裂まで走っている。壊せる。そう思った途端、無闇に楽しくなり、彼女は回りにある雪をどんどん固めて、次々に投げつけた。

巨石に氷塊が突き刺さるたび、キンと甲高い音が森に響く。

「そのくらいにしとき、星河」

「え？」

ひとつの岩石が砕け、古墳が全体のバランスを崩して倒壊するまで暴れた後、彼女は背後から呼びとめられた。ハッと、自分がしかしたことの大きさに血の気が引く。

「……お、お母ちゃん？ これはな、違うんよ、うち、な……」

声の主はすぐにわかって振り返るが、そこにいたのは奇妙な格好

をした母だった。

「ぷっ、ははっ、なんやの、その……ふぐっ」

叱られるという思いより笑いが勝った。子供六人を生んですっかりおばさん丸出しの体型となった母がバレエかフィギュアスケートの選手が着ているような、ラインを見せるピッタリとした衣装を身にまとい、切り株に座って脚を組んでいる。

「それ……くふっ、あかん、笑える、ぶ、ぶふっ。豚のプリマドンナ？」

星河は思ったままを口にした。

「だれがプリマダムや！」

母はそう叫びながら、中指を親指に引っ掛けて弾いた。

「へ？……つぎやはん」

十数メートルは離れていたが、星河はバットでぶん殴られるかのようなゴツンという衝撃と共に、仰向けにひっくり返る。パワーは段違いだ、それは確かにお馴染みとなっている母のデコピンだった。当たった場所に触れると血まで出ている。

星河は青ざめ、飛び起きて抗議した。

「ちょ……お母ちゃん、嫁入り前の可愛い娘の顔になんてことしてんの！」

「そこ？ あんた、ちょっと鈍いんちゃう？」

母は呆れた顔で耳の穴に小指を突っ込んでほじった。

「にぶい？ あんなあ？ こんなん傷跡残ったら、うち……って、あれ？ 治って？」

星河は言いながら手鏡で自分の顔を見ていたが、血を拭うともうそこには傷口もなかった。赤くなった形跡すら残っておらず、何事もなかったかのようである。

「まあ、ええわ。ちょっと見とき」

母はそう言って、スタスタと崩れた古墳に向かって歩いていく。

「……？」

「よっこいせー」

掛け声とともに、母は崩れた古墳の巨石を持ち上げた。

ひとつひとつが大型の重機でもなければ動かないような代物だけに、それだけでも信じられない怪力だったが、星河が砕いた方の岩石の欠片が勝手に動き出し、元々置かれていた位置へ戻り、みるみるうちに元通りの形へ修復されていく。

「は、へえ」

星河はぼかんと口を開けてそれを見守るだけだった。

「どうや？」

「お母ちゃん、ハムやのうて、スーパーマンやったんや……」

古墳と母を交互に見て、呟く。

「そこはせめてスーパーガールとか、プリキュアとかゆったらどうや？」

「……………そやな、キュアフラワーや」

妹と一緒に見ているアニメについて星河は重々しく言った。

「それババアやる。知ってるわ」

デコピン。

「ぎゃはんー！」

今度はひっくり返らず、踏ん張った。

「キュアムーンライトぐらいお世辞でも言えへんの！」

「高校生やで、お母ちゃんそれは犯罪や」

「セーラーマーキュリーバカにしとんか！」

「しらんわー！」

母娘の口喧嘩はなかなか収拾しなかった。

一通り落ち着いて母が説明を終える頃には日も暮れていた。

「まあ、つまりや、あんたは魔力を身体に吸収して使える、守護者になりうる資質があると。それが今日、ハッキリしたっちゅう話やな。あんたの雪玉で石を砕けたり、お母ちゃんのデコピンが飛んだり、傷がすぐに治ったり、重たいもんも持ち上げられたり、それもこれも魔力によって肉体が強いものに《変異》してるからということになる」

「お母ちゃんが世界を守ってたとか、信じられへん」
しんしんと積もる雪の寒さも気にならないほど、星河は考え込んでいる。

「あくまで昴の家がこの場所をずーっと昔から守ってきたというだけのことや、お婆ちゃんも、ひい婆ちゃんも、その前も。それで、星河はどうする？」

「……どうするて、うちがその守護者になるかどうかってこと？」
「そうや」

母はこっくりとうなずいた。

「そんなん……いややわ。戦うとか、できる気がせえへんもん」

星河は正直に打ち明けた。

話を完全に飲み込めたという訳ではないが、それでも自分がよくわからない魔界とやらからこの世界を守るために命をかけるなど想像もできなかったし、命をかけられるとも思えない。母が命をかけていることすら信じられなかった。

「まともな答えやね」

母は納得する。

「星河の気持ちがあつたらそれでもええ。けどな、これだけは言うておく。残念ながら、資質があるとわかった時点で、どの道へ進もうとも決して自由にはなれへん。あんたには生涯監視がつくし、様々な制限が待つとる。もしならんと決めたら、あんたはおそらく昴の家から遠ざけられる。ここはどうしても魔力の影響が強い場所やからな、その後も、たとえば住む場所も自由には決められへんかったり、職業選択も限られる。結婚もダメな場合がある。海外へも出られへん、国内の移動も事前に許可をとらなあかん。挙げていったらきりがない。まあ、言うてもピンとこんやろうけど」

「……お兄とか、お姉たちはどうやったん？」

母の言葉に心細くなりながら、星河は尋ねる。

「お兄は資質があつたけど守護者にはならん。男が守護者になるのは色々大変やねん。それに守護者の世界が昔っから圧倒的に女主導

つちゆうのもある。けど、大学出て官僚になった。簡単に言えば守護者のバックアップをするために政治の中枢を指すつちゆうことやな、あつちは言うても男主導の社会やから、これは適材適所や」「お兄も資質あつたんや」

「あの子は十七のときやつた。根が真面目な子やつたから大分悩んだみたいやけどな。それで宇宙そらは資質が出てない。穴の近くにずつと暮らしてて出てないんやから、おそらくないんやろう。だからなにも知らんと普通に大学生やつとる。この場合は知らない方が幸せやろう。一族やから監視がないわけやないけど、実質的には普通の子とそんなに変わらん。こういう場合は一生出ないことを祈るしかない」

上の姉について語るとき、母は表情を曇らせる。

星河は唇をきゅつと結ぶ。資質がないことで自由ではあるけれども、家族からはすこし外れてしまふ。それはなんとなく心苦しいことだった。

「銀河ぎんがは十二で資質が出て、守護者になるために学校に行つとる。跡を継ぐ、と言ってくれとるな。歌手になりたいゆうてて、お兄と色々話し合つた末のことやから、すんなりという訳でもない。あの時点ではあの子以外に後継者候補もおらんかったから、お母ちゃんもかなり無理をゆうた。今はわかってくれてるとは思つてるけどな」
下の姉について語るとき、母は申し訳なさそうに言う。

「うちが選べるんは、銀河姉のおかげなんか」

俯いて、星河は言う。

「そういうことや。けどな、そのことで星河が遠慮する必要はない。色々あつたんは確かやけど、それはそれや、最後に選ぶんは本人やからな」

「そやろうけど」

星河は顔を上げて、母の目を見る。

「ひとつ聞いてもええ？」

「ひとつと言わず何個でも聞いたらええ」

「ひとつでええんよ。お母ちゃん、守護者やってて死ぬと思ったことある？」

「ある」

娘の言葉に、母は即答した。

「それこそ何度もある。もう十年ぐらい前になるけど、後輩が死んだのも見た。自分がいつ死ぬかもわからん。まあ、給料は悪くないし、色々特典もある。けど、割に合うかどうかは保証できんわ。やるかやらんかは気持ちや。あんたに守りたいものがあるかどうか」「守りたいもの……か」

母の言葉に、娘はうなずく。

星河自身、意外なほど、その感情はしっくりと馴染んでいた。

「あるよ。うち、守りたいもの。お母ちゃん。うち、お母ちゃんも、お父も、お兄も、お姉たちも、みんな。そやから、助けになるなら……」

家族を見捨てる気にはならなかった。

「そんなにすぐ決めんでもええんよ？ 考える時間ぐらいは取れる」「そう言いながら、母は嬉しそうに笑った。

「うち、なるよ。守護者に」

星河も笑う。

そうして彼女の守護者への道がはじまった

1 昴 星河（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

2 イワしたる

星河の訓練は放課後、母の直接指導によって行なわれた。

生来、真面目な彼女は、友人らとの約束を断ち、学校が終わるとまっすぐ古墳に向かった。吸収した分の魔力を活動で消費するバランスを身体に叩き込むこと、それが第一歩である。

そして同時に守護者として必要な戦いの基礎を習う。魔法とは言うものの、魔力は肉体から離しては使うことができない。魔力が攻防においてその力を発揮できるのは、使用者の意志と接する範囲であり、それ以外では大気中に霧散してしまう。

ともあれ、母が投げる岩石をひたすら砕く。それが星河に与えられた課題だった。もちろん心得などない彼女は、ソフトボール大に砕かれた古墳の一部を投げつけられる度に傷だらけになったが、次第にコツを掴み、半年も経つと自分と同じぐらいの大きさの岩ならば、十数個一度に飛んでこようと両腕両脚をフルに使って粉々にできるまでに成長した。

「でも、守護者って不便やわ」

夕方からのトレーニングを終え、ストレッチをしながら星河は呟く。季節はすっかり夏になり、寒くはないが、Ｔシャツとハーフパンツは汗でびっしょりである。

「なにがや？」

普段着にエプロンをつけたどこにでもいる主婦然とした母は、粉々になった岩石は自動的に集まって大岩に戻るのを待ち、古墳を元通りにしながら答えた。

異様だが既に日常の光景である。

「ゆつたら、地上で魔力がようさんある場所やないと戦えへんのやろ？　ここかで、ふつうの人には見つからへんようになってる結果の中だけってことやん。敵さんが来たかて、戦うには中に来るまで待ってなあかんってことになる。どう考えても不便や」

「あんたがそんな心配するんは十年早いわ」

古墳のバランスを整え、背中を向けたまま母は娘の心配を鼻で笑った。

「敵がなにかもわからん癖に。ちよつと余裕でたらこれや。生意気つちゅう……」

「お母ちゃん！　うち、マジメにゆうてんやから」

星河は抗議する。

「方法はある！」

娘の言葉を大声で遮って、母はくるりと振り返った。

「そないなこと、だれでも考える。あんたがゆわんでもな！」

キツパリと言って、深く息を吐いた。

「……どうやって？」

星河は首を傾げる。

「鍵や」

「かぎ？　キーの鍵？」

「キーの鍵やもちろん。そろそろ頃合やるうとは思って上に頼んだ」

そう言いながら、母はエプロンのポケットからキラキラと輝く半透明の物体を取り出す。鍵と言われればレトロな鍵の形をしてはいるものが二本、一本は黄色に輝き、もう一本はほぼ透明に近く、辛うじて月明かりに照らされてその形を確認できる。

「受け取り」

そう言って、透明な方を投げる。

訓練で慣れた動きなので、星河は動ずることなくキャッチした。まるで重量を感じない透明の結晶は冷たくもなければ温かくもない。それどころか感触さえ定かでなかった。石や金属の類ではない不思議なものであるということがすぐにわかる。

「……なんなんこれ」

「守護者の鍵。これまでの訓練は、それを使うための準備に過ぎん」
母は娘に向かって黄色い自らの鍵を掲げる。

「見とき」

呟いて、その先端を自分の胸に一気に押し込む。

「え？ なんや？」

驚いた星河だったが、それはすぐに別種の驚きにとって変わられる。

母が胸元に当てた手をゆっくりどかすと、そこには黄色の輝きがある。そこから首、顔、そして腕、脚へと光が走り、年齢相応にゆるんだ身体は見る間に引き締まっていく。ほんの数秒後には子供を産む前、写真でしか見たことのない麗しかったころの母がいた。

「お母ちゃん、それ……どないなってるの？ 痛くないん？」

なんと言っても鍵が胸に刺さっている。

「……爪弾くは荒ぶる調べ」

厳かに母は口を開いた。

「アホか！ プリキユアはどうでもええわ！ どんだけ根に持つてるの？」

まるでわかっていたかのように娘は速攻でツッコミを入れた。

「あかん、そないやいやい、やる気なくなるわ」

「お母ちゃん！」

「知らん、お母ちゃんなんも知らん。この姿を見て、まず真っ先、褒めてもくれへん娘なんか知らんよ。ああああ、可哀想やわ、六人も子供産んでお母ちゃん可哀想！」

ぐにやりと全身の力を抜き、母はぺったりと地面に伏せた。

「可哀想で……」

呆れながらも、脚を百八十度開脚し、ぴったりと折り畳まれた柔軟な姿に星河は驚く。

「……お母ちゃん、美人や、うん、たぶん日本一やな」

「ほんまに？」

「ほんまほんま、三十代部門なら世界一でもええよ」

子供か、とツッコミたいのを堪えて、娘はにこやかに答える。

「そうか、お母ちゃん世界一か！」

「よ、お母ちゃん世界ー！」

胸を張って立ち上がる母を、星河は拍手で囃したてる。

「そうやる、このツンと上を向いたる乳も、キュウツとくびれた腰も、バンとした尻も、あんたら産んでくれたくなる前は世界ーやったんや！ そらもうモテてモテて大変やったんやで？ 聞きたい？ お母ちゃんの花盛りの君たちへ？ 聞きたいやろ？」

「え？ ああ、聞きたいわあ、うち、ほんま……」

早くもウンザリしはじめた娘を他所に母の長話がはじまった。

一頻り語り終えるころには、あまりの長尺に星河など空腹のあまり抱腹絶倒である。

「つちゆうことで、あなたのその小学生にしては立派な乳もお母ちゃんの遺伝や、感謝しいや……あれ？ なんの話してたんやっけ？ 星河？」

「ええよ、お母ちゃん。今、お父をどうやって落としかかって話や」

「あ、ああ……ま、それはええな。で、守護者の鍵やけど」

「やっと戻った」

娘は小声で呟いた。

「なにブツブツゆうてんの？ ここから大事やからな、ちゃんと聞き」

「……はい」

抵抗する気力もない。

「この鍵には二つの重要な効果がある。ひとつは魔界の穴を切り取って守護者自体に直接魔力を供給するちゆう、あなたが最初に言った、戦う場所を限定する条件の解除やな。ベースになる穴が塞がったりせん限りは、どこでも使えるし、その供給量も限りない」

人差し指を立て、母はそう言って親指も立てる。

「ふたつは経験の蓄積や。すべての鍵は、これまでに守護者が行なった戦いの記録が刻まれ共有されとる。情報量が膨大やし、使用者の実力に応じてしか引き出せへんものもあるけどな。それでも、鍵を使いさえすれば、専門的な格闘技を習う必要はほぼのうなる。基

礎としてあれば身体がスムーズに動くけどな、それはおいおいでええ」

「その、胸に刺して痛ないん？」

星河はずっと気になっていたことを再度尋ねた。

「これか？ 痛ないよ。この鍵は境界で出来てる、ここにあつて、ここにはない。つまり、これが肉体に影響を与えることはない。お母ちゃんもこれは説明しててよわからんけどな」

母は高らかに笑った。

「さよか……」

娘は脱力感に肩を落とす。

「まずは自分で使つて確かめることや、おいで」

母はそんな星河の腕をひっぱり、古墳の目の前へ連れていく。

すっかり夜も更け、濃い影を落とす巨石群が少女を見下ろす。それは魔力を適度に吸収し、風化に耐えることで、地上に放出される魔力の量を抑えてきた、魔界の穴を塞ぐ重石のようなものだった。いくら砕いても元通りになる、魂を持った石。

「どれでもええ、鍵を当ててみ」

「うん」

星河は手近な岩肌に確かめるようにゆっくりと透明な鍵を挿す。

豆腐に箸を立てるように、それは音もなくするりと飲み込まれ、じわりと光を抱いて輝き出す。

「あんたも黄色やな」

「色に意味あんの？」

「ない、性格が出るっちゆう噂もあるけど、血縁では大体一緒やからな」

「そうなんや」

光のぶん少し温かみを感じる鍵を引き抜くと、星河はそのまま自分の胸に押し込んだ。まるでそうしろと言われているようでもあったが、同時に自分の意志であることも確かだった。

これまでより強く魔力が身体を《変異》させようとしていること

を感じる。

「どうや？」

「なんか、気持ちええ……」

答えながら、しかしどこか上の空で星河はつぶやく。

「そやるうな、守護者の鍵は、理性が閉ざしている欲望のタガという鍵を外す、そんではじめて魂の深いところまで当人の望むものを《変異》として引き出せるわけやから」

母は娘の様子を見て話をつづけるのを止めた。

「……気持ちええ」

焦点の合わない目をとろんとさせて、しかし星河は内側から溢れてくるエネルギーのやり場を探していた。暴力的なまでの衝動、その対象を。半開きになった口で荒く息を吐き、そしてすぐ側の『的』を見つけるのに時間はかからない。

「よし、正気に戻るまで一丁やるか」

「……あ」

理性が答えを出すより早く、星河の拳が暴発した。

「ちよつと痛いけど覚悟しい」

母は娘の拳を受け止め、何十倍にもして返した。

それから数日後、昴家が管理する古墳を含め、全国の魔界の穴に対する大規模な襲撃が起こった。メイインターゲットとされた聖木乃女子学院ほど顕著な被害は出なかったが、戦いの中で星河の母、そして候補生であった姉も、被害を受けることになる。

鍵を手に入れたばかりの星河自身は自分も戦うことを希望したが、当然、許されなかった。彼女は未熟だった。ただ、荒れ果てた古墳の惨状と、魔力をもってしてもすぐには癒えない痛手を負った母と姉の姿を強く胸に刻むことになる。首謀者のひとりとされる守護者の裏切り者、聖の名前と共に。

「星河、あんた、聖の学院に行く気はあるか？」

再びの冬、母との訓練の最中、星河は不意にそう告げられる。

襲撃以降、更に熱心に研鑽を重ねた結果、彼女はめきめきと実力をつけている。それでも母が本気さえ出さなければウォームアップになる程度というところではあるが。

「いや？ 行かへんよ？ うちの、お姉と同じ学校行くし、なんで？」

突きのフェイントを読み、ハイキックをかわして、答える。

「結局、夏のことでもハッキリしたんは、守護者も平和な時代がつづいてもうて、実戦から遠ざかってたうちゅうことやった。お母ちゃんにしても本気を出すんは十年ぶり、四度目、数えるほどや。鈍ってた」

かわす娘をさせない連打で追い込みながら、母は言う。

「そう感じた人間はどうやらようさんおるらしい」

「？」

なにを言われているか計りかね、星河の動きが鈍る。

「そこっ！」

すかさず、母の身体が懐に潜り込み、肘が娘の下っ腹を打ち抜く。軽く浮いたところを流れるように顔面をつかまれ地面へ叩きつけ、首を押さえ込まれた。

「……げは」

「にわかには聖の学院がある、あの街が最前線になってきとる。これから守護者になろうゆう連中の中でも、特に上を目指すもんは、実戦により近い場所を求めて集まりつつあるうちゅう話や。そんなには、聖の娘もおるらしい」

「！」

倒れたまま聞かされた話に、星河は目を見開いた。

「まあ、正直に言えば、この話はお母ちゃんらの都合もある。特に古くから魔界の穴を専属で守つとる一族にとつて、その代表格のひとつである聖の裏切りはインパクトがでかかった。実際、国内では危険度があがつとるあの街にだれも送り込まんようでは体面がない。無理強いはしたくないんやけど、銀河はまだ回復に時間がかかるし、

都合がいいのはあんたしかおらん」

申し訳なさそうに言つと、母はゆっくり立ち上がった。

「お、お母ちゃん」

喉を押さえながら、星河は声を振り絞る。

「うちが……聖の娘をイワしたつたらええんや、ろ？」

かすれた声でそう口にして、にやりと笑う。

「……そこまではゆつてへん」

「同じことや」

鼻の頭を掻いている母を見上げて、星河は呟いた。

2 イワしたる（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

作中に登場した襲撃事件については前作「正義の街」（<http://ncode.syosetu.com/n1252t/>）をお読みいただければ詳細がわかります。登場人物についても引継ぎがあります。ただ、これは単にストーリーの起点であって、読まなくとも本作を読むのに支障ないように書いていきますので、あらかじめご了承ください。

3 そついう世界は違わなくて。

だいたい、体操でトレーニングには慣れてて。

平日の朝夕、休日のほとんど、そんなスケジュールも変わらない日常で、退屈して。たしかに魔力を取り込んで身体が《変異》とかして、バック宙が一回転は余分に飛べるとか、ムチャして筋を痛めてもすぐ治るとか、実感はあつたけど、神社を出たらその効果も切れて、競技会で披露できるわけでもなくて、結果に結びつかないから、あんまり、うっん。

ぜんぜん、楽しくなくて。

「学院に行けば同じ条件で競い合う仲間ができるから、辛抱して」平島さんはそんなことも言っただけど、あんまり期待、してなかった。

それで春休みは「お別れだから」とか言っで、友だちと遊び倒して、入学式前日ギリギリまでねばって、寮に向かうことにした。無理すれば通えないこともない距離で、お父さんもお母さんも無理して欲しそつだったから、逆に、ちよつと反抗してみて。

出発するとき、ふたりとも泣いてて。

「泣かないでよ、いつでも帰れる場所なんだから」

言いながら、ほんとうに家を出るんだつて思ったら、気分がはずんだ。まるで床を蹴つた瞬間に着地の成功まで見える瞬間みたいな、冴えたイメージ。

「行つてくるね」

真新しい制服の匂いに包まれて、期待してなかったはずなのに、キャリアバックを引っ張る脚も軽い。わたしは、中学生になる。新しい世界へ、やつと。

ステップを上げれる。

なんども通過していたのに印象のなかった木乃の駅は仮設だった。改札を抜けると、駅前には工事現場のまっしろな囲いと青空とぴかぴ

かの建物が描かれた看板で、今年度中にはおおきなシヨッピングモールが建つらしい。イメージアップが、なんだか現実的すぎる。

魔法で消し飛んだなんて、だれに言っても信じてもらえそうにない。

平島さんには「だれにも喋っちゃダメだから」としつこいぐらい言われて、喋ったらわたしだけじゃなくて、その話を聞かされた人もふつうの生活には戻れない、なんて、おどかされたけど。秘密の話があんまりウソっぽいから、喋ろうって気になれなくて。

そこはワクワクする気持ちを裏切られてた。

でも、学校からすぐに遊べる場所ができるなら『ふつう』にいい考え方。ふつうじゃないことを楽しむのも、ふつうのことを楽しむのも、両方あり。そう思ったら、学校が二倍楽しめるような気がして。だから、わたし。

向かう先がライバルだらけだつてこと、忘れてた。

「 聖木乃女子学院寮前」

専用のバス停、中部部から大学部まで希望者すべて入っているという寮は、ヨーロッパ風の建物が何棟も並んで、その間にはレンガ敷きの道、オシャレな街路灯と、青々とした街路樹、パンフレットで見ているけど、そこだけ別の街みたいになつてて。

「あー……」

ちよつと、引いた。

体操の世界でもそうだけど、すごい人は、すごい大事にされる。

そういう世界は違わなくて。

ここにもある。

現実的に。

だから、カラフルな洗濯物がなびく女子寮街の奥の棟「かえで」に着いたときには、楽しい気持ちはぺしゃんこに潰れてた。身体の動きが決まらないときの、重たいイメージ。

自動ドアの玄関ロビーへ、のるのろと。

「よつこそーっ！ かえで寮へ！」

パンっ！ と明るい声といっしょに、紙テープが視界にひろがって。

「はい？」

「こんにちは、今日、入寮の府本里美ちゃんでしょ？」

たったひとりでわたしにクラツカーを向けている女の子がいた。たぶん年上。かなり大柄。同じ制服を着ていて、趣味の悪いピンクのエプロンを着けて、蛍光グリーンの髪の毛が上へ立っていて、それらにも負けないパンクなメイクをしてて。

生活感があるやら、ないやら、

「……はい、府本です」

理解できなくて、ほかになにも言えない。

「ようこそようこそーっ！ この寮長をしています。中等部三年、戸田圭子です。捕捉すると、生徒会の副会長でもありません。困ったことがあつたらなんでも訊いてね？」

「……」

名前ふつう！ 生徒会副会長？ 気さく！

リアクションに困ることがたくさん。

「ささ、まずは部屋へ行きましょう。二人部屋なのは聞いてるよね？」

「あ、はい」

「荷物の到着順で部屋割り決めてるから、里美ちゃんは308号、これカードキー」

言いながら戸田さんはカードをわたしに手渡すと同時にキャリアバックをひったくって歩きだす。ついて行くしかない。

「一応、セキュリティでオートロック。守護者候補生ならドアぶっ壊せるし、ふつうの暴漢なんか相手にもならないけど、基本的には寮内は鍵の使用禁止だから。あ、『守護者の鍵』ね、カードキーじゃなくて、府本さんは『外の人』だからまだもらってないと思うけど、入学式のあとすぐもらえるから」

「外の人？」

「ああ、そうだね。ここ、生まれで守護者関係の人とそれ以外の人
は区別されるから。ちなみに私も外の人。逆に『内の人』なかのひともいるん
だけど、内の人の内側でも区別があつて『家持ち』とそうじゃない
人が……それはどうでもいいね」

戸田さんはどんだん喋つて勝手にうなずいて。
どうでもいいのかな？

「朝食と夕食は一階の食堂、こっちの奥」

エレベーターのボタンを押しながら戸田さんはどんだん説明する。
「朝食は午前六時から七時半、夕食は午後六時から八時、お昼はこ
このキッチンでお弁当も作れるし、買って食べてもいい。手引きの
通り。里美ちゃんは食品にアレルギーとかある？」

「え？ いいえ、別にないです」

「そう？ あつたら言つておけば別メニューにしてももらえるから、
遠慮しないでいいよ？ あとは、寮の門限も八時、遅れると罰があ
るので注意して。休日遊びに行く時は外出許可が必要で……みたい
な細かいことは入寮の手引きに書いてある通りね」

「は、はい」

すぐにエレベーターはやってきた。

「お風呂は食堂の反対側、各部屋にシャワーはついてるけど、大浴
場は広くて気持ちいいよ。サウナもあるし、利用する人は多いね。
水着は禁止、なんでかはわからないけど。伝統？ あと掃除はこま
めにとか、ゴミの収集日とか、そのあたりは」

「手引きですか」

わたしは、先回り。

「そうだね、うん」

戸田さんは笑顔でうなずく、蛍光グリーン髪が揺れる。

三階へ移動して、エレベーターホールから左手、一番奥が308
号室。

表札には『昴 星河・府本 里美』の文字。

すばる、ほしかわ？

「じゃ、同室の星河^{せいが}ちゃんと仲良くね？」

「あ、ありがとうございました」
せいが、って読むんだ。

情報量にくらくらしながら、ともかく頭を下げる。

「いえいえー、学年違っても、条件は一緒だから、お互い頑張ろうねー」

戸田さんはさわやかに手を振って来た通路を戻っていく。

わたしは、深呼吸して。

なんだか、あれよあれよと連れてこられちゃったけど、これからしばらく一緒に暮らす人と顔を合わせる緊張がやってきた。人見知りはない方だけど、第一印象はとても大事。好かれなくてもいいけど、嫌われたり、疎まれたりするのはいくはない。

学校生活が楽しくなるかどうかのポイントになる。

「すばる、せいが」

名前を、つぶやいてみて。

まるで技にはじめて挑戦するときのような、もやもやしたイメージ。

でも、イメージにとらわれてはいけない。お父さんはよくそう言ってる。まずはやってみる。そしてあとは修正していけばいい。それは体操でも、人と人との関係でも、同じだって。

チャームを押し。

ぱたぱたと軽い足音で、彼女はすぐに出てきて、迷わずドアを開けた。

「どちらさん？」

ジャージ姿の昴さんは、わたしの頭から足の先まで、遠慮なく見て、首を傾げる。

「同室の、府本里美です」

相手がそうなので、わたしも遠慮しない。さらっとした長い黒髪に、白い肌、すこし垂れ目、ちょっと低い鼻、厚ぼったい唇、丸い顔、バランスは美人。けど、なにより目を惹くのは、大きな胸とく

びれた腰、野暮つたいのに、スタイルの良さが隠せない。

「なんだか敗北感。」

「うちは昴星河。なんや……ちっこくて可愛い人で良かったわ」
昴さんは恥ずかしそうに笑いながら、言っ

「は……」

悪気はないとわかってても、わたしは、言葉に詰まった。

ちっこくて？ そう、お父さんとお母さんにもらった、体操向き
のわたしの身体。おっぱいもおしりも小さくて、でも鍛えたから脚
は太いし、肩幅も胸囲もあって、しなやかだけどやっぱり筋肉だか
ら、女の子っぽくなくて、髪形も地味にまとめて。べつにコンプ
レックスじゃないし、誇りすらあるけど。

でも、それでも、言われてうれしく、ない。

あっちが明らかに優越感を持つてる場合は、とくに。

「どうしたん？」

たぶん、褒めたと思うし。

「わたしも、なんか……おっぱい大きい美人で良かった、って言え
ばいい？」

けど、嫌味で返して。

「……はあ？」

初対面から、ほんの一分。

わたしたちは、もう、ライバルだった。

3 そうついつ世界は違わなくて。(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

4 「よろしく、おねがいします」

手引きによると。

相部屋には、競い合うと同時に仲間意識を高める、目的があるそう
うで。けど。

「なんやねん、ややこしいっ」

「……」

人によるんじゃないかな。

わたしが先に届いていた荷物を開けて整理している間、昴さんは、自分のベッドの上に説明書を広げて、ケータイに悪戦苦闘中。わたしに聞かせたいのかどうか、独り言が多くてわかったのだけど、どうやら中学に上がるので買ってもらったらしい。はじめてって、いまだき珍しい人だ。新しいからとかそういう理由で選んだっぽいイエローのスマホ。

それがわかるのは、わたしも中学入学で機種変してて。

同じ機種の色違いっぱいからなんだけど。

「ワイヤレスネットワークってなんや、ぶるーとうーす？ おまえもか」

知らんぷりして黙っとこう。

こっちからケンカ売ったわけなので、助けを求められるまで、助け
けない。

自分で覚えた方がいいと、思うし。

十畳よりは広いフロアリングの部屋には、入ってまっすぐ正面中央に広い窓とベランダがあって、シンプルな木の机と同じ素材っぽいベッドが左右の壁にひとりーセットずつ、クローゼットも一つずつ、部屋の中央にはテーブルが一つ、玄関からの通路脇右手に小さいガス台と流しのキッチン冷蔵庫一つ、左手にユニットバス、エアコン。食堂や大浴場がなくても暮らすには十分なものが揃っている。荷物の片付けは昼前に終わって。

しばらくは食べられないから、とお母さんが持たせてくれたお弁当を食べようかな。

と、テーブルの上にピンクの包みを置いて。

「……………」

「……………」

昴さんと目が合った。

それで、わたしは、気づく。このテーブル、もしかして？ って。落ち着いてみると、クローゼットやベッドや机とは違う安っぽさ。ペラッとしたツヤのある黄色。コンロの上に乗ってるヤカンも同系色。座っているベッドのシーツ、窓のカーテン、これみよがしに彼女が着ているパーカーも、うるさくならないぐらいの統一感を持たせてイエロー。

染められてる、この部屋。

そういうこと、まるで考えてなくて。ツメが甘い。

思わず唇を噛む。

「食堂で、食べよっかな……………」

気取られないように、自然なフリでゆっくり、わたしは包みを掴んで外へ出ようと立って。

「べつに、使ってもええよ？」

背後から昴さんに呼ばれる。

「……………」

くっ。

先手、取ってるつもりが、取られてて。

くやし。

「そっ？」

声だけは平然と、答えて。

これをムシしたのでは、イコジになったと思われて、負け。

振り返って。

「うちかて、そのつもりで持ってきたんやし？」

穏やかな微笑みを装った、昴さんの勝ち誇りの表情が目に入る。

実力差があきらかな競争相手が格下に向かつて「おたがいがんばりましようね?」とか言うあの感じ。体操では、何度も格下の立場で味わってる、けど。

「この世界で、それに甘んじたくない。でも。」

「……昴さんは、お昼、いいの?」

この状況を逆転する手がすぐには、思いつかなくて。

「これ終わったら、な」

薄く笑いながら、再びケータイをいじってる彼女を見るしかなかった。

「そっか」

第一ラウンドはわたしの負け。

それほどのこと? って、たぶん言われるだろうけど、これはプライドの問題。常日頃から積み上げられた勝敗が、最終的に力関係にも影響を与えるって、わかっていればこそ。さすが関西人、小さなことからコツコツと、いやらしい。

わたしも、だけど。

小さい身体を、もっと小さくしながら、包みをほどいて。

お弁当は、いつになく気合が入っていて、わたしの好物ばかり。手作りだとわかるおおきなロールキャベツ、たまご焼き、ポテトサラダ、そぼろご飯。それが、もっとくやしさに拍車をかけて、重たくて。お母さん、ごめんなさい。

涙が出そうぞうで。

「おいしそうやね?」

昴さんの追撃に血液が沸騰しそうだった。

そんなこと言われたら。

「まだ、お箸つけてないから、食べる?」

こつ返さなきゃいけない。

相手を睨まないように顔を上げて、自分でもわかるくらい、引きつった笑顔で。これもムシしたら、つけあがらせるだけだから。怒りを飲み込んで。

「なんや、催促したみたいで悪いな、ええんよ？　うちのことは気にせんでも」

言わせたクセに。

「こつちこそ、わたしだけ食べるなんて、悪いから」

ここはガマンだ、わたし。

「お近づきの印に」

「そやな、そうまで言われたらな……」

「どーぞどーぞ」

昴さんにお箸を差し出して、わたしは顔を伏せる。噛み締めた奥歯がイタイ。

「そやったら、一口」

そう言つて、昴さんはロールキャベツの中央に箸を立て、半分に割つた。崩れないようにしっかりと煮たキャベツはさくつとそれを受け入れて、たつぷりとスープの染み込んだ中身をさらけ出す。滴る肉汁、冷めてもおいしいのをわたしはよく知っていて。

よだれを、飲み込む。

「いただきます」

え？

そのまま？

昴さんはロールキャベツの半分をそのまま、箸でつまみ上げる。

それは冷凍食品のロールキャベツなら三個分ぐらいはあるはずなんだけど、おおきく開いた口へ。

一口で。

おおきいよ！

「……ん、んまいなあ」

口いっぱい噛み締めて、昴さんは目を輝かせて。

「いけるわ。これは」

さらにたまご焼きを間髪入れずにさらった。

そのとき、わたし、かなりマヌケな顔してたと思う。たぶん。

昴さんは一切こちらを見なかった、ためらう素振りもなく、すべ

てのメニューをおおきな一口で奪った、ざくざくと、情け容赦なく、寸断されたロールキャベツと、山崩れを起こしたポテトサラダと、路頭に迷うたまご焼きと、掘り返されたそばろご飯、跡形もない。

わたしのお弁当が、昴さんの残したお弁当にランクダウン。

「おいしかったわあ、ありがとうな？」

ほんとうの満足感が彼女の顔にはありありと。

「それはよかった……」

わたしはその顔から視線を外すために返された箸の先端を見つめる。

さすが関西人、コテコテに、あつかましい。

わたしが、食べるように言ったんだ。それはわかっている、きっとコモンセンスなんて共有してないとわかってても、この感情は、うらみ。食べもののうらみ。

わすれない。

ぜったい、わすれない。

のろのろと、それでもおいしいお弁当を食べている内に、いつの間にか、昴さんは部屋から消えて。わたしは空のお弁当箱を流して洗って、ぼんやりとその午後をひとり過ごした。ケータイが何度か鳴って、メールの一通がお母さんから、ちよつと泣いて。南向きのベランダから、斜めに西日が射して、わたしの方のベッドを照らす。

そして日没。

「うわ？ なに？ まっくらにして……府本さん、夕飯は？」

八時過ぎに部屋に戻ってきた昴さんが電気を点けてわたしを見ておおげさに飛び退いて。さすが関西人、ハデなリアクション、うつつしい。そう思いながら。

「食欲、なかったから」

わたしは、それだけ答えて、部屋でシャワーを浴びて。

読むでもなく、机に手引きを広げて座って。

無言のまま。

「消灯、十一時やねんけど、どうする？ 起きててもええけど」
「いいよ、べつにそれで」
就寝。

わたしは、気づくと教室の席に座っていて。

制服とかもきちんとしていて、胸には飾りがついてて。

「ひじり 聖、あきゆ 勇希……よろしく」

目の前ではすらっとして背の高くてやたら目鼻立ちの整った美少女としか言えない子が、か細い声で自己紹介をしている。まるで現実感なくて。

「次の人」

教室中の顔がみんなわたしを見ていた。

「……え？」

あれ、入学式、終わってる？

「次の人、府本さん？ 起きてる？」

教壇の上で、女の先生っぽい人が首を傾げてて。

ひじり……、は、ひ、ふ。

「わたしの、番？」

名簿順に座らされたような。

「そうよ？ 大丈夫？」

その先生が言うのと、教室に笑いが起こって。

「だいじょうぶ、です」

ぼーっとした頭のまま、立ち上がって、教室を見渡して、そして。

「あっ！」

心配そうな顔をしている昴さん見つけた。クラスメイト？

「ど、どうかした？ 府本さん？」

「……いえ」

どれだけショック受けてたんだ、わたし。

教室中がわたしを心配していた。入学式から心ここにあらずの同級生がいれば、わたしだって心配する。恥ずかしい、どうかしてる。

自分で思っていたより、緊張していたのかもしれない。魔法とか言われて、半年。見知らぬ世界へ、わりと理解しないまま飛び込んでる。けど。

たしかなことは、ひとつあった。

守護者になる。

才能がないと見放された体操ではなく、資質があると言われたわたしの力で。

「……府本、里美です。わたしがここに来たのは」
ほんとうの、世界で。

「みんな蹴散らして、勝って、守護者になるためです」
教室がざわめいて。

だれかは鼻で笑って。だれかが息を飲んで。

目の前の美人は無表情で。教壇の先生は驚いた顔で。

昴さんは眉をひそめて。

「よろしく、おねがいします」

4 「よろしく、おねがいします」「(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

5 自意識過剰、極まってて。

自己紹介も終わって。

魔法とか守護者とか関係なくホームルームが進んで。

「では、クラス委員は礪波^{れいなみ}さんに決まりました」

先生が拍手して、みんなも合わせて拍手。

黒縁のメガネにおさげ髪のいかにも適役な子が、その雰囲気を選出されて。

「あらためまして、礪波^{みこと}命です。今年一年、微力ながら、みんな仲の良いクラスになるようにがんばりたいと思いますので、ご協力お願いします、ね？」

なんだか、わたしを見て言った、ような気がする。

教室にクスクス笑いが起きたから、きつと、もう問題児あつかいになってるっぽい。自己紹介だけでクラスの和を乱すとか、そんな感じ。わたしは机に頬杖。協調性とか、同調圧力とか、こういうところも、魔法とか守護者とか関係ないらしくて、つまんない。

なーなー、ってこと？

そんなだから、裏切り者が出て、魔界の穴が危機、とかなっちゃうんじゃないかな。なんて真剣に思ってもないわたしだって考える。「特別な力を使うのだから。おたがい緊張感をもって監視し合うべき」って言ったのは平島さんだったけど。

ほんと、同感。

「それでは、先程説明した通り、今晚八時に高等部中庭で『鍵』の授受を行いますので、まだ持っていない人は忘れずに、授業は明日からになります。お疲れさまでした」

昼前に解散、でも。

本番はここから。先生が教室を出ていく。配られたプリント類をカバンにしまいながら、わたしは周囲に注意を払う。自己紹介であれだけケンカを売れば、だれかしらを買ってくれるはず。とりあえ

ず、この場所での実力が知りたい。まだ鍵を貰ってないから、魔力は使えないけど、同じ条件で競うなら《変異》前のベースで十分だ
って。

ならば、好戦的で、自分に自信を持つてる相手が、力を量るには
丁度いい。

「……さてと」

つぶやいて、立ち上がる。何人かの視線がこちらを向く。いい感
じ。

さあ、トレーニングの成果、試させて。

カバンを肩にかけながら、目が合う相手を探す。そして。

「待ちいな、あんた」

教室の前の方から、一直線にこちらに向かって歩いてくる、彼女
がいた。

厚めの唇をへの字に曲げて、鼻息も荒く。

「やっぱり……」

思わず、笑ってしまう。だろうと思ってた。

それでこそ、ライバル。同じ部屋になったのは偶然じゃなくて、
必然だって。

昨日のお弁当のうらみ！

「聖いつー！」

彼女は机に、どんっ、と手を突いた。

「……」

そして、にらみ合う。

「すば……え？」

言葉に詰まったわたし、じゃなくて。

わたしの前の、カバンを両手で持ち、楚々と立つ、聖さんと、に
らみ合う。

「……なにか、用？」

昴さんの威圧に整った表情にかけりひとつ見せず。

「なにかやあらへん！ わかつとるやる！ この学院の、前理事長

の曾孫！」

その動じない態度が気に入らない風で、昴さんは怒鳴った。

教室中が注目している。最初から、見られていたのも、わたしじやなかった、とか？

曾孫。聖。そうか。わたしは、ポンと手を打つ。聖木乃女子学院の「聖」は苗字、ひとつ勉強になりました。じゃなくて。わたし、今、すごいカッコわるい！ ケンカ売って、買ってもらったものだど相手を間違えるなんて。それもライバルだなんて。自意識過剰？ 頬に手を当てると、もう顔が熱い。こそつと着席して、目の前の二人の成り行きを見ることにする。

ちいさくなって。

「なんとか言ったらどうや！」

「……」

怒鳴る昴さんに対して、聖さんは口元に手を当て、考える素振り。その仕草は様になって。どちらかと言えば活発そうなショートカットだけど、こんな大きな学校を持った曾孫というだけあって育ちがいいのか、上品。小振りな唇と、さっぱりとした鼻筋、長い睫毛が憂いを帯びて、指は長くて、脚は細く、高い身長わりに、おっぱいもおしりもないけど、それが逆に、しとやかに魅せる。

同じ美人でも、どちらかと言えば派手なタイプの昴さんとは好対照。

「……」

長い沈黙があつて。

「なんとか」

聖さんが表情も変えず発した一言に、教室内を戦慄が駆け巡る。マジで言ってるのか、ボケてるのか。

一番近くから見てるわたしにも、わからない。でも。

「古典的やけど、まあ許すわ。ツカミとしてはな……」

明らかに苛立ちながら、けれど、関西人らしく笑いに寛容であるうとしてるのか、眉間に皺を寄せて、でも愛想笑いをして。昴さん

はうんうんと相手の肩を叩き、

「……でもな、そうやない。そうやないよ？ 聖。うちがゆうつんのはな？」

優しく言いなおした。

「あんだ」

「だれ？」

すっと、口元に当てていた掌を上にして聖さんは差し出して。

さすがに、場の空気が凍りついたのがわかる。

「だれ？ て、うちのことゆうつんの？」

昴さんの声が震えていて。

それは、まるで知り合いのように、ケンカ腰で攻めてて、相手が自分のことすら意識してなかったってわかったら、すごいカッコわるくて、つまり、さっきのわたしみたいに。

自意識過剰、極まってる。

「昴、星河や」

「はじめまして」

とくに申し訳なさそうにでもなく、聖さんは頭を下げた。彼女がらすれば、知らない、今日あったばかりのクラスメイトが、チンピラだったっていう感じ。でも。

「……はじめまして？」

自己紹介しなおして、なお否定された、昴さん。技は完成していたのに着地失敗して会場が溜息に包まれる、あの文字通り立場ないシチュエーション。残念感。

気の毒で、見られない。

そう思ったのは、わたしだけじゃなかったらしく、ギャラリーの半数ぐらいはさりげなく教室を出て行って。わたしも、二人ともの視界に入る距離じゃなければ、間違いなくそうしたんだけど、あまりに近くに居すぎて、取り返しのつかない空気に飲まれてた。

「ちっ」

舌打ちをして、昴さんが、制服の上着ポケットに手を突っ込む。

すると、わたし以外のクラスメイトが身構える。

「だめ！ 星河ちゃん、ここで鍵なんて使ったら！」

同時に、クラス委員の子が、聖さんを庇うように、正面に割って入った。

口ぶりから、どうやら知り合いらしい。内の人？

「どき、命」

「どかないよ。入学初日に学校壊すつもり？」

メガネのクラス委員さんは、そのレンズのしたの大きな瞳で、じつと昴さんを見つめる。

「……壊したかて、どうせ、こいつの家が金を出すだけや、かまわへん」

「そんなことしたら、星河ちゃん守護者になれなくなる」

「かまわへん！ あんたかて今のやりとり見てたやろ？ こいつがどないなつもりで守護者になるうとしてんのか、はつきりしたやないの。身内から裏切り者が出て、なあんとも思ってない！ せやから、うちの名前を聞こうが！ クラスメイトの名前のどれを聞こうが！ 顔色ひとつ変えん！ 自分の家の裏切りが他の家にどんな被害を与えたか、考えてもなければ、知ろうともしてない！」

昴さんは叫びながら、黄色に輝く鍵をかざす。

「やったのは聖さん本人じゃないでしょう？」

クラス委員さんは首を振った。

「だからなんや？ そんなん関係あるか！」

それでも収まらない様子の昴さんは、怒鳴って、鍵をおおきな胸に押し込む。平島さんが使うのを見たのも数度だけど、あれは守護者の鍵だ。近くにいらからか、肌に魔力を感じる。

「ついでや、なんもわからんのにそこにおる府本、あんたにもゆうとく」

そして不意にわたしを見て、言った。

「……わたし？」

たしかに、話の半分もわからないけど。

「耳かっぱじいて、よく覚えとき？ この世界を魔界にしてみわんために、世界中の仲間と協力するんが守護者や。なるためやったら周りを蹴散らすとかゆうあんたや、いつ裏切るかわからんそのボンクラみたいなもんには、資質はあっても資格はない！」

「資格って……」

資質に目覚めたら、守護者になることしか選びようのないシステムになっている、と、わたしが反論しようとした、そのとき。背筋が凍った。

動こうとした、という気配もなかった。無言のまま、クラス委員さんの肩越し、聖さんの腕が素早く伸びて、昴さんのシャツの襟を掴んだ。反対の手が、紫色の鍵を握っている。

聖さんの、その涼やかな目には、隠しきれない怒気が溢れていて……「なんや、やるんか」

強がる昴さんふくめ、その場にいた全員、明らかに萎縮していている。だから。

反応が遅れた。

「ひ、聖さん！ 待つ……」

クラス委員さんが叫んだ瞬間には、教室の窓ガラスが一枚残らず粉々に砕けて。

二人は消えてて。

ギャラリーも消えてて。

わたしと、クラス委員さんだけが残っていた。

「ほんと入学初日から、困ったな……。あ、ごめんなさい、ね？ 府本さん。星河ちゃんはなんていうか、救いようのないほど物事の考え方が直線的だから」

メガネのつるを押さえて、微笑んだ。

「……えっと、れいなみさん？」

まったくフォローしてない気がして、わたしも思わずつられて笑って。

「命でいいよ」

「なら、わたしも、里美でいいです」

「里美さん」

「命さん」

わたしたちは、呼び合って。

「私も、追いかけてよと思うんだけど、里美さん、まだ鍵持ってないよね？」

「ええ」

聞かれて、うなずいて。

「ここに置いていっちゃうとひとりだけ先生に叱られちゃうから、一緒に行かない？」

そう言いながら、命さんは自分の鍵を取り出した。緑色の鍵。

「おねがい、できます？」

割ってもいない窓ガラスで怒られるのは、おもしろくない。

「蹴散らさないでくれるなら」

「それはまた今度で」

わたしは妥協する。条件に差があるから。

「じゃ、今度」

命さんは鍵を胸にさし込むと、わたしを抱えて窓から飛び出した。

5 自意識過剰、極まってる。(後書き)

お読みいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305y/>

候補生たち

2011年12月18日06時46分発行